考えるとはどういうことか

外山滋比古

集英社インターナショナル　ウェブ立ち読み

目次

まえがき 5

第一章 平面思考から球面思考へ——ところ変われば意味変わる 9
日は昇る／球面には裏がない／第四人称の場／演劇という球面世界／島国文化／「転がる石」と球面思考／変化を認める辞書／第四人称ならではの解釈／「ナショナリズム」は平面思考

第二章 触媒思考——知識と経験の化合が新しい価値を生む 35
知識と思考と経験／否定された経験／生活重視／全寮制教育／ことわざの知恵／川柳の価値／触媒思考／知識と生活経験の化合／セレンディピティ

第三章 選択の判断力——人はなぜよく考えずに選択するのか？ 59
選択力／考えて選ぶ／選択方式／見合いか、恋愛か／恋愛の墓場？／浅い判断力／私益と公益／民主主義は大丈夫か／理性的判断

第四章　曖昧の美学――日本語は「悪魔の言語」か？　83
「悪魔の言語」？／アイランド・フォーム／言葉を読みとる／言外のニュアンス／彫刻的／曖昧の論理／国際的文化

第五章　民族論理学――言葉の数だけ論理がある　101
新しい世界／思想も直輸入では通用しない／難解な翻訳表現／加上の説／センテンスという概念／点的論理／後方重点／冒頭重点／外交のベース

第六章　二次的創造――一次的創造より価値がある　123
料理は高度な知的活動／アルコールという大発見／豊かな社会が生んだデザイナー／建築の世界／エイゼンシュテインの映画理論／スポーツ監督は二次的活動／奏者と指揮者／エディターの出現／エディターシップ

あとがき　155

編集協力　岡田仁志
キャラクター（トレッくま）イラスト　フジモトマサル
カバーイラスト　おおの麻里
装丁・デザイン　立花久人・福永圭子
（デザイントリム）

まえがき

知ることと、ものを考えることとは、まったく違います。それどころか、両者は仲が悪いのではないかと考えられます。そういった奇妙な考えにとりつかれたのは、思えばずいぶん前のことです。

きっかけは、小中学生の作文を読む仕事をしたときの経験です。

小学一、二年生の児童の書く文章は、のびのび、自由に思ったことを書いているのが多く気持ちがいい。子供の息づかいが伝わってくるようなものもあって、うまいものだと感心します。ところが、高学年の五、六年生になると、全体として生気に欠け、文字を並べたような文章が多くなり、かつての生き生きした勢いがほとんど失われています。勉強して学力もついているはずなのに、どうしたことでしょう。中学生になると、さらにいっそう面白くない、退屈な作文が多くなり、かつての表現力はどうしてしまったのだろうかと

思うほどです。

くり返しくり返し同じような疑問をいだいていて、仮説めいたものにとりつかれました。それは、知識と自由な思考とは両立しにくい。それどころか、対立して互いを圧迫するのではないか、さらに、知識と思考との間には反比例の関係が成り立つかもしれないというものです。知識がふえればふえるほど思考は弱体化し、知識の乏しいものは、思考力をつよく発揮できる。そういえるかもしれないと考えました。

大学で学生が論文を書くときにもこの知識と思考の対立が現れます。勉強家で、参考文献などをよく読んだ学生が、読書からの借りもので論文を作る傾向がつよく、独創性に乏しい。他方、あまり本も読まないような学生の中で面白い着想の論文を書くのが現れるのです。参考書などあまり読まないほうがオリジナルで面白い論文ができる、のかもしれない、ではなく、それが当然だと思います。

若いとき独創的な仕事をした研究者が、年を経て、専門に関する知見が豊富になると、クリエイティヴでなくなっていく、というおきまりのコースも、やはり、知識によって思考が圧迫されるためかもしれない。知識が多くなりすぎるのはかなり危険である、と思うようになり、子供の思考力が意外に高いことを、そういう解釈で納得しようとしたのです。

たいていの人間は、年齢とともに知識の量をふやし、その分、思考の発動を抑止するのだとすると、創造的な仕事は、あまりものを知らなかったときにしかできないことになって、いかにも哀れです。

不用意に知識をふやしていけば、知識メタボリック症候群の病状を呈するおそれもあります。これまでの知識万能思想はそのことを故意に見落としていたのです。

ふえすぎた知識は捨てなくてはならない。知識はゴミではないが、ありすぎて、あふれるようになればゴミと同然です。ゴミ出しが必要で、惜しいなどとはいっていられません。とにかく頭をすっきり、働きやすいようにするのです。そこで忘却の出番となります。これまでに知識社会において、知識を失うことになる忘却は目のかたきにされてきましたが、知識過剰のおそれが出てくれば、忘却はポジティヴな機能を持っていることが自ずからわかってくるはずです。

人間は誰しも、自然忘却によって精神的安定を得ています。睡眠中のノンレム睡眠によって、日々、頭の掃除をします。朝目覚めて、気分爽快、頭脳明晰であるのは、そのおかげです。

情報化時代などといって過剰な知識を頭に詰め込めば、頭は困惑します。睡眠では十分

に不要な情報を始末できなくて、持ち越すことになり、それが、いずれは知的不活発、思考停止の状態になりかねません。現代のわれわれは大なり小なりこの危険にさらされていることになるように思われます。よく忘れ、よく考えるのが、これからの頭です。

余計なもののない、整理された頭を自由に働かせるのが、思考です。

ひと口に思考といいますが、何かについて考える、とか、何々を考えるといった場合の思考は目的思考というべきものです。それに対して、課題や問題にしばられることなく、まったく自由に頭を働かせるのが自由思考で、ときに発明、発見をもたらすことがあります。子供の発想がしばしば天才的であるのは、子供の頭が、知識でいっぱいになっていなくて、自由思考に適しているからでしょう。

子供でなくなった人間が自由思考をするのはなかなか難しいですが、童心に還(かえ)ることができれば、自由思考も試みることはできるように思われます。

この本に収められているエッセイは、憚(はばか)りながら私の自由思考の軌跡です。いくらかでも参考になるところがあれば幸いです。

第一章

平面思考から球面思考へ

ところ変われば意味変わる

日は昇る

これまで人類は科学の力によって、多くのことを解明してきました。しかし、真実を頭で理解してはいても、それを心の底から実感するのは簡単ではありません。

たとえば、いわゆる天動説を信じている現代人はいないでしょう。コペルニクスやガリレオのおかげで、太陽が地球のまわりを回っているのではなく、地球が太陽のまわりを回っていることがわかってから、もう何百年も経っています。

ところが私たちは、いまでも「日が昇る」「日が沈む」といういい方をやめようとしません。動いているのは太陽ではなく地球のほうなのに、「地球が動いて太陽が見えた（見えなくなった）」ということを表す簡潔な言葉はありません。せめて天文学者たちは別のいい方をしてもよさそうなものですが、やはり「日が昇る」といいます。つまり私たちは、頭では地動説を受け入れていても、日常生活では相変わらず天動説的な感覚を持って暮らしているわけです。

それだけではありません。天動説から地動説へ転換する以前に、人類は地球が丸いことも発見しました。これも、頭では誰もが理解しているはずです。しかし実際には、相変わ

らず自分たちが球面ではなく平面の上で暮らしているように感じている人がほとんどではないでしょうか。

ポルトガルの探検家フェルディナンド・マゼランの艦隊が世界一周に成功するまで、ヨーロッパの人々は、大西洋の向こう側は断崖絶壁だと思っていました。この世界は水平線のところで終わりだと信じていたのです。ところが、その世界の果てに向かってまっすぐ進んでいくと、向こう側に落ちることなく、ぐるりと回って戻ってくる。それを知ったとき、当時の人々は相当なショックを受けたに違いありません。

それ以来、人類が球面上で生きていることが頭の中での常識にはなりました。しかし、宇宙から撮影した地球の写真でも見れば話は別ですが、日常的に目にする世界はやはり平面です。そのため私たちは、自分たちが球面上で暮らしていることがなかなか実感できません。

たとえば二〇〇一年九月一一日の米国同時多発テロは、日本時間の夜に発生した事件でした。ところが現場の様子を生中継するテレビを見ると、朝の明るい空の下で、世界貿易センタービルが煙を上げながら崩壊しています。時差があるので当然なのですが、あの光景を見ながら違和感を覚えた人は多かったでしょう。頭では「日本の夜はアメリカの昼」

であっても、昼と夜が同時に存在することが不思議に思えてしまうのです。だからテレビに映る光景に、どうもリアリティが感じられません。何となく、ウソの風景を見ているような気持ちにさえなるのです。

こんな感覚は、テレビが広く普及するまで誰も味わったことがありませんでした。それ以前は、どんな大事件も過去の出来事としてしか見ることができなかったので、国内の事件も海外の事件も同じ平面上で起きたように感じられたのです。私たちはそんな「平面思考」をいまだに引きずっているので、昼と夜が同時に存在する球面上の出来事をうまく把握できないのではないでしょうか。

球面になじんでいないのは、感覚や思考だけではありません。ヨーロッパやアメリカなどの遠い国を訪れたことのある人は、時差ボケを経験したことがあるでしょう。これも、科学技術が未発達だった時代にはあり得ませんでした。ジェット機で短時間のうちに遠くまで移動できるようになった結果、身体の時間感覚と現実の時間のあいだにギャップが生じ、生理的な不快感になるわけです。人間が時差ボケに苦しむようになってずいぶんになりますが、このギャップを埋める方法は、まだないようです。

球面には裏がない

いずれにしろ、人類はまだ「平面思考」から「球面思考」への転換が十分にできていないといえるでしょう。

昔の人間は小さな世界で生活していましたから、本当は球面上で暮らしていても、それを意識する必要がありませんでした。どこまでも同じ平面が続いているという前提で、物事を考えていればよかったのです。

ところがテクノロジーの発達によって、私たちは遠い国の映像を生中継で見たり、短時間で遠くまで移動できるようになりました。以前よりもはるかに大きな世界の中で生活するようになったわけです。しかし私たちの思考は、この変化に対応しきれていません。球面思考を身につけなければ大きな世界に対応できないのに、いまだに古くからの平面思考によって生きています。

もちろん、それを克服する努力がまったくないわけではありません。たとえば幾何学の分野では、一九世紀に「非ユークリッド幾何学」が生まれました。平面上の図形を扱うユークリッド幾何学と違い、こちらは球面、曲面での幾何学です。そこでは、たとえば平行

線が交わることもあるし、三角形の内角の和も一八〇度ではありません。球面上に三角形を描けば、内角の和が一八〇度よりも大きくなります。平面思考と球面思考では、単純な図形にも大きな違いが生じるわけです。球面上の出来事を平面思考で把握していれば、大きな錯覚や誤解が生じかねません。

また、二〇世紀の初頭には、美術の分野で「キュビスム」が生まれました。パブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックによって創始された技法です。それまでの絵画がひとつの視点から見たものを描いていたのに対して、彼らはさまざまな角度から見たものをひとつの画面に描き込みました。「キューブ」は立方体のことですが、これも一種の球面思考といえるでしょう。一枚の絵の中に正面から見た顔と横顔が同時に存在するのは、地球上に昼と夜が同時に存在するようなものです。

このように、平面思考から抜け出して球面をとらえようとする思考法はこれまでにいくつか提案されてきました。しかし私たちは、それを日常的にはっきりと意識するレベルにまではなっていません。たとえば南米のブラジルやアルゼンチンなどを「地球の裏側」と表現するのも、平面思考の表れでしょう。実際には、球面に裏側などありません。日本からまっすぐに進んでいけば、平面の端を回り込むことなしに、つまり裏側へ回ることなく

南米まで行けます。

ちなみにイギリス人は、この日本とブラジルのような位置関係のことを「対蹠地（たいせきち）」もしくは「対蹠点(antipodes)」と名付けました。この言葉が生まれたのは、南半球のニュージーランドやオーストラリアを植民地にしたときのこと。当初は地の果て、地球の裏側などと呼んでいましたが、そのいい方は現地の人々の反感を買うため、そんな言葉を考え出したのです。これは、平面思考から球面思考への転換を図る工夫と考えてよいでしょう。

遠く離れた外国を裏側にあると考えると、そこが自分たちとつながりのある場所だと思いにくくなります。それでは、世界で起きていることを正しく理解できません。特にいまは、情報技術の発達で世界が狭くなっている時代。外国のことを、自分たちと切り離された別の場所だと思っているようでは、国際関係がうまくいくはずがありません。外交官や政治家も、平面思考で外国とつきあっているから摩擦や戦争が起こるのかもしれません。球面思考で、お互いにつながった存在としてつきあっていけば、衝突を避けられるのではないかと思います。

第四人称の場

では、どうすれば平面思考から球面思考に脱皮できるのでしょうか。

そこで考えてみたいのが、私たちの言語における人称の問題です。やや唐突な印象を受けるかもしれませんが、球面思考は対象と自分の関係性や距離感が平面思考とは大きく変わりますから、人称にも影響を与えずにはいられません。

どんな言語でも、基本的に三つの人称があることは誰でも知っているでしょう。日本語の「私」や英語の「I」などの第一人称、「あなた」や「you」などの第二人称、それ以外のすべてを指す第三人称です。

言語に三つの人称があるということは、私たち人類が、この世のあらゆる関係性をこの三つを軸にして認識しているということにほかなりません。そして、実はこれが平面思考の根っこにもなっています。それは、三つの人称が点だと思えばイメージできるでしょう。点は、二つ結ぶと線になり、三つを結ぶと面になる。したがって、平面思考では人称が三つあれば事足りるわけです。

逆にいえば、人称が三つしかないことが、球面思考への転換を難しくしているというこ

とにもなるでしょう。第一人称から第三人称まででは、球面をしっかりと把握することができません。だとすれば、文法では認められていない「第四人称」を取り入れることが、球面思考への第一歩になります。

とはいえ、言語の中に存在しない第四人称は、四次元の世界と同じくらいイメージしにくいものです。いま、「あなた」は「私」の書いた本を読んでいるわけですが、「あなた」の近くに二人以上の人がいたとしても、それはみんな第三人称の存在であって、第四人称ではありません。人間以外のもの——あなたの座っている椅子や手元にあるコーヒーカップなど——も第三人称の存在です。

しかし、だからといって第四人称的な立場が存在しないわけではありません。たとえば、道端で二人の男がケンカをしているとしましょう。この場合、当事者にとっては自分が第一人称、ケンカの相手が第二人称。とばっちりを受けないように気をつけながら行き交う通行人や、「やめろやめろ！」と仲裁に入る人がいれば第三人称です。

しかし、ケンカの周辺には、そのいずれとも違う立場でそれを見ている人がいます。とばっちりを受けず、仲裁に入る必要もない距離から眺めている見物人です。怒りや恐怖に駆られている第一～第三人称の人々とは違って、彼らはケンカを面白がることができる。

内心では「もっとやれ！」と思っているかもしれません。第一～第三人称の人々が作る平面とは別の次元に立っているから、第一～第三人称とはまったく違った見方ができるのです。

火事にも、同じような側面があります。当事者と同じ平面にいる人々は決して「もっと派手に燃えろ」などと思いませんが、その外側にいる無数のものは他人の不幸を美的に受け取ることが許される。だからこそ、「火事と喧嘩は大きいほど面白い」というけしからん言葉も生まれたのでしょう。そうやって、一般的な道徳から離れた価値観を持つことができる立場こそが、ここでいう第四人称です。

演劇という球面世界

その原型が、演劇の観客であることはいうまでもありません。たとえば劇中で殺人があったとします。舞台という平面上にいる登場人物たちにとって、それはあってはならない悲惨な出来事です。ところが客席で見物している人々にとってそれは作り話にすぎないので、誰も本気で嘆き悲しんだりはしない。むしろ事の成り行きを楽しむというところがあります。舞台上の世界がそのまま客席に持ち込まれることはありません。舞台と客席は同一平面上にはないのです。

その意味で、演劇は人間が最初に発見した「球面世界」だといえるでしょう。「平面世界」だとしたら、観客も舞台上の人々と同じ道徳律にしたがって物事を判断しなければならないでしょう。

そういう球面世界の論理を認めない哲学者も、かつてはいました。あのプラトンがそうです。プラトンは、道徳的に間違ったことを面白おかしく書く劇作家や詩人の存在が許せませんでした。そのため芸術的創作そのものを人間として間違っていると考え、認めようとしなかったのです。平面思考の考え方を代表していたことになるでしょう。

プラトンのあとに現れたアリストテレスは違いました。詩や演劇は人間にとって面白いし、必要でもある。そう考えたアリストテレスは、絵空事のフィクションが許される理屈を考えたのです。

そこから生まれたのが「カタルシス」という考え方でした。人間はふつうに生活をしていると、どうしても心の中に毒のような悪い感情が生まれてくる、それをそのままにしておくのは有害だ、とアリストテレスは考えます。たまった悪いものを外へ出す解毒剤のような作用をするのが、フィクションだというのです。かりに道徳的に間違った感情が芽生えても、芝居で悪に触れれば、実際に暴れたりしなくても心の中がスッキリする。いわば

「毒を以て毒を制す」ような発想だと思えばいいでしょう。だから悪を描く芸術的創造も存在が許される、というのがアリストテレスのカタルシス論です。

第三人称までの平面的な世界しか認めなかったプラトンを乗り越えたという意味で、これは発明でした。創作で描かれる世界は、第四人称という球面世界で見るからこそ存在意義があるのです。

島国文化

もちろん私たちはふだん、自分が第四人称の立場にいることなど意識せずにフィクションを楽しんでいます。しかし実は、第四人称になれるかどうかは、受け手側にとって大問題。小説にしても、もし読者が第一～第三人称の立場にしかなれなければ、面白さが違ってきます。

たとえば、父親が作家として書いた私小説を実の息子が読むケースなどはこれに近いかもしれません。知り合いがケンカをしているのを見ても「もっとやれ！」とは思えないのと同様、肉親の作品を純粋に芸術作品として楽しむことはできないのです。

赤の他人の書いた作品であっても、第四人称の立場で読むことができない人もいるでし

よう。フィクションに対する感受性を持ち合わせていないと、作品世界の当事者のような気持ちになってしまい、高みの見物ができません。道徳的に間違った行動をする登場人物のことが許せなくなり、読み進めるのが嫌になってしまったりするのです。「文学のどこが面白いのかわからない」という人はたまにいますが、その多くはこういうタイプなのではないでしょうか。プラトンも、おそらくそうだったのだと思います。

こうした感受性は、個人差があるだけではありません。文化や社会によっても、第四人称の受け入れ方には差があるようです。たとえばアリストテレスがカタルシス論を唱えたギリシャでは、比較的早い時期から演劇が発達しました。他方、演劇がなかなか発展しなかったところもあります。ほかならぬ日本です。

日本は決して、芸術的創造の分野で諸外国に後れを取っていたわけではありません。『万葉集』や『源氏物語』などがあることを考えればわかるように、叙情的な詩歌や物語に関しては世界の中でも先進国といえるでしょう。ところが不思議なことに、能、狂言、歌舞伎などの演劇文化が花開いたのはかなり遅くなってからです。

もしかすると、これは日本語の特徴と関係があるのかもしれません。というのも、ヨーロッパの言語は第一人称の主語を大事にするのが基本です。主語がなければ、文が成り立

たない。それに対して日本語は、たとえば「昨日、新宿に行きました」と主語を省略しても十分に文意が通ります。むしろ、いちいち「私は」と第一人称の主語をつけるとうるさいくらいです。

その背景には、西洋人とは異なる日本人独特の感受性があるのだと思います。実生活のなかでも、「俺が俺が」と出しゃばる人は、無用の摩擦を起こす存在として煙たがられます。だから言語も、第一人称をあまり重視しないものになったのでしょう。その結果、人称という概念そのものが、西洋の言語と異なるものになったのです。

もしそうだとすれば、私たち日本人は第四人称になじみにくい性質を持っているのかもしれません。それは同時に球面思考が苦手だということを意味します。周囲に陸続きの外国のない島国であることも、その一因かもしれません。陸続きの異世界があれば、よその国の出来事を傍観者的に面白がることができます。しかし島国の場合、目に入る出来事はどれも第一～第三人称の範囲内になりやすい。つまり平面思考になりやすいということです。

「転がる石」と球面思考

もう少し具体的に、球面思考とはどんなものなのかを考えてみましょう。

第一～第三人称と第四人称の違いを見ればわかるように、平面世界の論理や価値観にとらわれずに別の考え方ができるのが球面思考の特徴です。そのため、同じ出来事や言葉についても、平面思考と球面思考ではその意味合いが大きく変わることがすくなくありません。

たとえば、“A rolling stone gathers no moss.”（転がる石は苔をつけない）という英語のことわざがあります。いま初めてこれを知った人は、「だからどうした」と首をかしげたのではないでしょうか。苔をつけないことが良いといいたいのか、悪いといいたいのか、よくわからないからです。

このことわざは、もともとイギリスで生まれました。ですからイギリス人は、「どういう意味だ？」と考えたりしません。彼らにとって、苔は財産や社会的信用といった良いものです。頻繁に転職をしたり、引っ越しをくり返したりなど、落ち着きのない人生を送っていると、その良いものが身につかない。つまり「転がる石」のような人間は成功しない——というのが、このことわざの意味になるのです。日本の「石の上にも三年」に近いニュアンスだと思えばいいでしょう。

しかし、これはイギリスという平面世界での意味です。このことわざが後にアメリカに

渡ったとき、その意味は正反対で使われ始めました。アメリカ人は、苔を悪いものだと考えます。一カ所にじっとしていると、垢や錆びのような良くないものが溜まる。常にピカピカと輝きを放つ「転がる石」はのぞましい。アメリカ人は、そういう意味でこのことわざを使うのです。英語という同じ言葉でつながっていながら、生活が違うと意味がひっくり返ってしまう。

この意味の違いを、イギリス人もアメリカ人も長い間、よく知らずにいました。それぞれ自分たちの常識に照らして当たり前のように使っていたのです。

ところが第二次世界大戦後、たくさんのアメリカ人が日本にやって来たとき、英語に詳しい日本人が「おや？」と思いました。日本で英語を勉強した人間は、「転がる石は苔をつけない」をイギリス的な意味で理解していました。それなのに、アメリカ人たちはどうやら逆の意味で使っている。日本人は、イギリスとアメリカでは逆の意味のことわざであることにたいへん驚きました。

とはいえ、それ以降のアメリカ人が、すべてこのことわざをイギリスでの原義どおりに使うようになったわけではありません。本来の意味とは逆になっていても、自分たちの解釈のほうが良いと思っています。

平面思考では、このアメリカ人の解釈は間違っているということになるでしょう。第一～第三人称の世界で暮らしている人にとって、同じ言葉が別の意味を持つのは受け入れがたいことです。実際、イギリスの辞書では、アメリカ人の使い方を認めていません。自分たちが使っている意味だけが書いてあります。一方のアメリカも、辞書でイギリスの原義は説明していない。どちらも平面思考で、ひとつのことわざにはひとつの意味しか認めていないのです。

ところが日本では、戦後、辞書にこの両方の意味が併記されるようになりました。それはそうでしょう。現実に二つの意味が使われている以上、どちらが正しいかを決めることはできません。「ところ変われば品変わる」ならぬ「ところ変われば意味変わる」というわけで、二つの意味が両立することを認めているわけです。イギリス人でもアメリカ人でもない第四人称的な立場だからこそ、日本人にはそれができました。いい換えると日本人はここでは球面思考が働いているのです。

これが、球面思考の本質といっていいでしょう。二つの対立する価値観を前にしたとき、第四人称的な立場から見れば白黒はっきりさせる必要はありません。それぞれの解釈を認めて、両方とも受け入れることができるのです。そこに新しい面白さが生まれます。

ちなみに、このことわざに二つの意味があることをうまく活用したのが、「ザ・ローリング・ストーンズ」というロックバンドでした。彼らはイギリス出身ですが、アメリカでも（というより世界中で）人気を獲得して大成功しました。イギリスとアメリカでバンド名の意味合いが違うので困るのではないかと心配する人もいるかもしれませんが、問題はありません。イギリスでは「根無し草の風来坊」といったニュアンスになりますが、新しい文化を暗示します。一方のアメリカでは、常に「転がる石」のように新鮮な音楽を作り続けるというイメージになるので、これも悪くない。どちらの意味で解釈されても、マイナスにはならないわけです。ひとつの言葉に相反する二つの意味を込めて成功させたという点で、球面思考的な知恵のあるネーミングだといえるのではないでしょうか。

変化を認める辞書

ところで、同じ言葉でも意味が異なることは、同じ国の中でも起こり得ます。時代の移り変わりによって、ある言葉が別の意味に転じることは珍しくありません。

たとえば「我慢」という日本語は、字面を見ればわかるとおり、もともとは「自慢」と同じような意味でした。辞書にも「我意を張ること」「強情」「自分を偉いと思っておご

り、他を侮ること」といった意味が載っています。夏目漱石も、小説『道草』の中で強情な男のことを「我慢な彼は」などと書きました。

しかし、いまの日本に「我慢」をその意味で使う人はまずいません。「転がる石は～」の原義を知ったときのアメリカ人と同じように、いまの説明を聞いてビックリした人も多いでしょう。いつの間にか、「我慢」は「自分の欲求を抑える」という意味で使われるようになりました。いわば誤解です。

とはいえ、それを間違っていると指摘したところで、いまは無意味です。原義とは違っていても、すでにそれが定着したいまとなっては、元に戻すことなどできません。しかし、だからといって昔の意味を間違いとするわけにもいかないでしょう。それを否定すると、昔の人たちが残した文章を正しく理解できなくなってしまいます。時代を隔てた意味や価値観の違いも、球面思考で両方を受け入れるべきです。

そこで重要な役割を果たすのは、やはり辞書でしょう。「転がる石は～」については英米の辞書がそれぞれ平面的な解釈しか認めていませんが、そういうことではいけません。日本の辞書のように、両方を認めて、説明するべきです。

しかし日本の辞書も、ことわざに関しては長いあいだ両論併記を認めない傾向が続きま

した。たとえば「犬も歩けば棒に当たる」がそうです。この「棒」はもともと「災難」の意味ですから、辞書も「何かをしようとすれば、何かと災難に遭うことも多いというたとえ」などと説明していました。

ところが時代を経るうちに、この「棒」を「幸運」という良い意味に解釈する人たちが出てきました。犬も歩いていれば肉のついた骨に出くわすことがあるのだから、あちこち出歩くのは決して悪いことではない――というわけです。イギリス人が良い意味で使っていた「苔」をアメリカ人が悪い意味に見なし、「転がる石」のような生き方を肯定したのとよく似ています。その背景には、おそらく日本人の価値観の変化があるのでしょう。昔は「あまり余計なことはしないほうがいい」と思っていた日本人が、「失敗を恐れずに活発に行動したほうがいい」と考えるようになったのかもしれません。

しかし、「犬も歩けば棒に当たる」を良い意味で解釈する日本人がふえても、辞書の説明はなかなか変わりませんでした。基本的に、辞書を編纂する人は昔の辞書を踏襲しながら新版を作るので、新しい意味が出てきてもそれを取り入れることをしません。そこには言葉の本当の意味を知っているのは自分たちだという思い上がりがあるのかもしれません。

その悪弊をあらためた最初の辞書は、三省堂の『新明解国語辞典』でした。古い辞書を

引き写すのではなく、現在の日本人がそれぞれの言葉をどういう意味で使っているのかを調べて書くようにしたのです。すでに死んでしまった古い意味だけではなく、生きている言葉の意味も説明するようになったのはきわめて大きな功績といえるでしょう。

そういう新しい動きが出てきたこともあって、ようやく、「犬も歩けば棒に当たる」の説明を両論併記する辞書がふえてきました。犬も歩けば災難に遭うという解釈も、幸運に出合うという解釈も、どちらも認める。古い平面世界にこだわっていた辞書が、球面世界に出て第四人称的な見方をするようになったわけです。

第四人称ならではの解釈

言葉がもつ意味は、絶対的ではありません。そもそも言葉は人間が作り出したものですから、それ自体が最初から何らかの明確な意味をもっているわけではない。使うのもその都度、臨時の意味を与えているだけのことです。

したがって、ひとつの言葉にひとつの意味が切っても切れないものとして結びついているわけではなく、使う人間の立場や価値観によってニュアンスが変わるのは当然のことです。そういう相対的なものとして理解することが必要でしょう。

前にお話ししたとおり、「転がる石は苔をつけない」という英語のことわざについては、日本人も二つの意味を相対的に理解することができました。終戦直後の話です。しかし、初めて西洋の学問や文化を積極的に取り入れようとした明治期はどうだったでしょうか。外国の文化を、第四人称の立場で相対的に見ていたとは決していえません。むしろそれを絶対視し、自分たちも西洋人になったようなつもりで受け入れていました。

そのため、たとえば向こうの言葉を日本語に翻訳するときも、西洋人と自分たちでは同じものでも違って見えることを考慮に入れませんでした。たとえそこに違和感を抱いても、それは正しく理解できないのは自分たちが悪い、誤っていると考えたのです。

西洋に対して第四人称的な立場にいる日本人が、向こうの言葉をすべて第一～第三人称の立場で理解できるはずがありません。極端な話、西洋人にとって悲劇的な思想が、日本人には現実的に見えることもあるでしょう。それは、西洋人から見れば誤解や偏見に満ちた感覚かもしれませんが、第四人称の立場にいる以上、きわめて誠実な態度です。まったく関係のないケンカを見て、本音では「もっとやれ！」と思っているのに、口先では「ケンカは良くない」などと建前ばかりいうほうが、実は偽善的で不誠実な態度ではないでしょうか。

ですから外国を理解したいなら、まずは第一～第三人称の立場で一〇〇パーセント正しく理解することを諦めたほうがいいことになります。そこに何らかのズレがあったとしても、第四人称の自分自身にウソをつかず、正直に受け入れることに価値があるのです。そうでなければ、その理解は実感の伴わない単なる物真似にしかなりません。

相手と同じ立場で理解できるのは、おそらく一〇〇のうち六〇～七〇程度でしょう。これでは不完全なので、残りの部分は第四人称の側から適宜補わなければいけません。そこに誤解や偏見が入り込む余地もあるわけですが、第一～第三人称の平面世界では思いつかないような面白い解釈が生まれる可能性もあります。そうしてオリジナルな意味を作り出していけるのが、球面思考の喜びとなるのです。

「ナショナリズム」は平面思考

平面思考は、非常に狭い範囲にかぎられた常識の世界にすぎません。その外側には、その常識が通用しない世界が広がっています。それを認めない平面思考には一般に未知のものを嫌う傾向がつよいといえるでしょう。知らないものや異質なものを「これは理解できない」と排除してしまうことが多いのです。

おそらく鎖国時代の日本には、そんな考え方をする人が多かったのだろうと思います。わからないから、外国に反発を感じ、否定しようとしたわけです。そして明治に入ると、今度は何でも向こうの平面世界に入り込んですべてを理解しようとしました。

しかし外国の文学などを少し勉強してみると、わからないからこそ面白いと思えるようになります。平面思考で理解できる日本の小説を読むより、意味のわからない外国の作品を読んだほうが面白く感じられます。それは、第四人称の立場から自分なりの解釈ができるからです。つまり、読むという作業を通じて大きな自己表現ができる。そういうことを認めるのが、球面思考です。

これまで日本人は、正しい解釈があるのだから、自分の勝手な解釈はよろしくないと考えがちでした。でも、たとえば未知の土地を訪れたとき、その土地の面白さを現地の人から教わろうとします。土地の人が知っているとはかぎりません。長く住んでいる人たちにとっては当たり前でつまらないものが、初めて訪れた旅人にとっては新鮮な面白さに満ちていることもすくなくないでしょう。逆に、現地の人が「ここに来たらこれを見なきゃダメだよ」と奨めるものが、旅人から見れば凡庸で退屈なこともある。ある国の美点や欠点も、第四人称の外国人が発見する可能性は大いにあるのです。

そう考えると、国と国との外交にも球面思考が欠かせません。いわゆる「ナショナリズム」は平面思考の典型です。自分の国のことは自分たちがいちばんよく知っていると考え、異質な見方には反発する。ひとつの国のナショナリズムと隣の国のナショナリズムは決して両立しません。そして対立して戦争が起きるのです。

宗教にも似たような面があることはいうまでもないでしょう。世界各地で発生する紛争は、必ずといっていいほど何らかの形で宗教的な対立が絡んでいます。本来は人間社会の平和に貢献すべき宗教が戦争の原因になるのは、自分たち以外の価値観を認めようとせず、平面思考で凝り固まっているからにほかなりません。

もちろん、社会が進歩するには競争が不可欠です。しかし、価値観の異なるものを排除する平面思考では、競争が闘争になりがちです。相手を潰して自分が勝ち残るのではなく、お互いの違いを認め合い、共存共栄を図りながら競争することを考えなければ、平和な世界にはなりません。山の杉の木のように、ケンカをせずに高さを競えばいいのです。球面思考は、そんな世界を作るための第一歩です。

考えるとはどういうことか
外山滋比古 著

発行・集英社インターナショナル　発売・集英社
定価 1,000 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7222-0

ウェブでのご予約・ご注文は こちらにどうぞ！